

## 「足尾銅山鉍毒事件の今日的意義」

---

高橋若菜（宇都宮大学国際学部准教授）

皆さんおはようございます。まずはじめに、本日このような機会をいただきましたことに、日光市の皆様、そして本学で重田先生、学部長を始めスタッフの皆さん、そして学生のみなさん、そしてご来場の皆様にお礼を申し上げたいと思います。

今日お話しする内容は『足尾銅山鉍毒事件の今日的意義』というタイトルでございます。最初にお断りしておくべきなのですが、私は足尾の専門家ではありません。ただ、環境問題を政治の視点から、国際的に比較をしたり、歴史軸の中で捉え直すということを専門としています。足尾については、例えば、『越境大気汚染の比較政治学』という昨年上梓いたしました本で、ごく 2、3 ページ触れさせていただいているのみでございます。

ただ、私も宇都宮大学に着任してから 15 年経ちました。足尾は公害の原点であると同時に、近代化の重要な拠点でもありました。なんどか緑化のお手伝いにも行かせていただきました。また、この数年は授業で足尾・渡良瀬にフィールドスタディに行っております。そのような専門や教育の経験を踏まえ、足尾鉍毒事件を歴史軸、国際的な軸から捉えて、ここからどんなことを過去から何を学んで、未来につないでいけるのか、そのきっかけとなるようなお話を少しでも提供できればと思っております。本日は山田さんの後にお話をさせていただくこと、緊張しておりますが、胸を借りながら、お話をさせていただきます。

先ほど申し上げたように、私の専門は環境政治学です。私は、環境問題というのは基本的に政治問題でもありと考えています。公害問題はどんな場合でも、きっかけとなるような産業活動があります。それによって、私たち国民の大半は利益を得ている。その一方で一部の人たちに苦しみを与えられてしまう、これを社会的ジレンマとよびます。絶え間なく続く社会的ジレンマを、どういうふうに解消していけるのか、それを近代、現代、そして未来を生きていくなかでどう捉え直せるのか、これは政治問題です。

まずスライドの、足尾の光の部分から見ていきましょう。光の部分の中心は、やはり銅山としての発展です。1610 年から開山と山田さんもおっしゃられましたように、江戸時代からずっと足尾の銅の生産というものは行われていました。江戸後期には、鉍脈は一旦尽きたかと思われましたが、明治期に銅山を貫き下げた古河市兵衛が鉍脈をみいだして、近代技術をどんどん投入して飛躍的に生産を上げていく、これが日本の殖産興業・軍事立国を支えている、という構図です。

特に大正時代、そして昭和の終わりの方、これは軍需を支えて生産量がまた上がります。戦後期はだんだん下がり、敗戦後も少しさがりますが、また高度経済成長があり、銅の生産がこれを支えている。そのあと、産銅停止になるのが 1973 年という状況です。

この表が明治中期の主要輸出品です。足尾は、年によってもちがうのですが、だいたい日本の銅生産の 3 割から 4 割、生産していたということです。この時期、銅というのは主要な輸出品でもありました。戦後に途上国は、未開の時代から、発展していくときにまず

主要な資源を売り、そのあと今度は物を加工して軽工業から重工業に移っていく経済成長を遂げるというモデルがありますが、戦前の日本はまさにその時代であったわけです。

さきほど山田さんがおっしゃられた通り、銅というものはむしろ海外に売るものだったのです。今は完全に輸入側ですが、当時は輸出して、いろんな意味で殖産興業・軍事立国を支えていた、そういう存在でした。

足尾で行われたのは、今私が申し上げたような銅資源の採掘、そしてそれを加工していく、粗銅を作っていく、これを精錬作業と言いますが、両方の工程が行われていました。最初は自山鉱が多かったんですけども、昭和の中期以降は、外国からの銅も入ってきて、ここで精錬をしていたわけです。銅山の一連の生産を一手に引き受ける舞台となってきたのが、足尾町です。

足尾町というのは、さきほど山田さんがおっしゃってくださいましたように、明治大正時期は、小東京と呼ばれるような場所であったといえます。ガソリンカーの話があったように、古河はとて学校教育にも力を入れました。お話を聞くと電気代も無料であったといえます。色んな利益が町にもたらされました。この写真をみてください。小野崎一徳さんの写真集からのコピーですが、こちらが古河市兵衛の葬儀です。足尾町の一万人を超える方がこの葬儀に集まった。どれほど古河一族というものがここで重要であると受け止められてきたか、ということの顛れであるかと思えます。また先ほどお話にありましたような掛水倶楽部も作られました。

このような繁栄の時期には、下のグラフが示しますように、人口が増えるのですけれどもそこからどんどん減っていきます。これは労働人口、街の人口です。銅山が閉山する、そして精錬所も閉所する、それ以降急速に過疎化が進んできているという状況です。今現在は高齢化・限界集落化と、ある意味で日本の社会問題を先取りしたようなそういったところもあるかと思えます。

今申し上げたように、銅の生産のプロセスに関連して光の部分、すなわち多面的な受益が多くありました。一方、影の部分、すなわち受苦について次に見ていきましょう。この図に、銅生産に伴う環境への影響を、ごく簡単にまとめてみました。一般的に、単純化すると、銅生産は、採鉱、採掘、選鉱、精錬というプロセスを伴うわけですが、それぞれにさまざまな環境汚染物質というものが排出され、多面的な環境被害というものをもたらすというような構図でございます。すなわち受苦ですね。

この受苦は、受益側であった足尾町も受けていました。さきほど山田さんがおっしゃったように、そのどういう世界か私には検討はつかないですが、水もない、緑もない、そういう状態、生活音もないとおっしゃられました、そのような世界であったということです。枯れた木、山というのが後ろに広がっている中に足尾はあったのです。

そして先ほど申し上げたような銅生産のプロセスのなかで、今度は足尾から鉱毒がどんどん流出して、そして南側に流れていきます。そして肥沃な大地であった渡良瀬流域に鉱毒による甚大な被害をもたらしていくのです。困窮した農民の代弁者として登場するのが、

ご存知の田中正造です。上流では松木村が、そして下流では谷中村が、廃村になっていく、悲劇を伴いました。多面的な生態系破壊、人体被害、故郷喪失、想像を絶するような痛みを伴う、こういった社会的ジレンマを生じさせていたということです。

この光と影の関係をごく簡単に時代の流れとしてまとめたものがこちらのスライドにございます。右側に書いてあるのがまさに近代化と繁栄、光の部分です。そして左側に書いてあるのが環境破壊、人権侵害です。ご覧いただくと、明治期、大正、昭和初期という時代にとっても環境破壊、人権侵害というものは集中しております、この二つは背中合せです。もちろん戦後復興期以降は随分変わってきます。これは世界的にもそうなんです。1960年代末から70年代以降、一気に世界の公害対策は進みます。明治には到底なかった公害防止技術がどんどん開発されてくる。これは、実は古河鋳業さんの公害技術蓄積と今日の経営にもつながってきているのです。一方、足尾という舞台について言えば、銅の採掘や精錬所というものは停止され、経済は斜陽になっていくという状況です。

左側の部分で時間の流れをもう一度確認しましょう。環境破壊・人権侵害の影の側面です。ごく簡単に説明すると、上流の方では森林伐採、松木村が廃村になっていく、そして、この渡良瀬河の流域においての鋳毒被害を田中正造が問題提起をしたことで古河鋳業は予防鋳毒工事を何度も行なっていくんですね。古河鋳業の「創業 100 年誌」をみますと、その工事額は巨大で、経営が実際に傾くくらいの投資であったと書かれております。ただそれだけの費用をかけても、戦後期と違って、この時代、完全に公害防止技術というものは決して育っていないのです。工事が行われたとはいえ、被害は無くなりません。被害は戦後しばらくまでずっとつづきます。その間に谷中村が廃村にされました。

一方戦争に突入していく、日本の軍国主義がどんどん進む時代、古河鋳業は軍需会社として指定されていきます。大変な軍需があるなかで、銅生産をしなくてはならない、一方で若い男性はどんどん兵士として戦地に送られていく。そこで担い手として連れてこられるのが朝鮮人、そして中国人・白人の捕虜です。こういった外国の方々に対しては、軍国主義の日本では、極めてはげしい人権蹂躪があったということは、二度とこのようなことが繰り返されない為にも、歴史の一ページとして、きちんと記憶に留めておかねばなりません。

そのあと敗戦で占領下に置かれ、日本が戦後復興期を迎える中で、また銅生産はどんどん生産が増えていきます、この頃、砂防ダムの工事をはじめ、様々な環境対策も始まっていきます。だけれども、事後対策では、なかなかうまくはいかないところもあったわけです。一部には自然は再生しているけれども、源五郎沢堰の決壊はなんどもありました。最近では2011年、東日本大震災に伴って起きました。渡良瀬流域のカドミウムの値が、通常の基準を超えてしまったと新聞記事に出ておりました。そういった負の遺産が、今日に至るまで引き継がれ、残り続けているのです。

ところでこのスライドには、レジリエンスという言葉も書きました。レジリエンスという言葉は、復元とか復元力といったようなことを意味します。全てではありませんが一部

で、復興している、再生してきている部分もあるということです。でもこれは完全に元にもどす、回復ということではありません。逆にいうと元に戻すことはできない、だけれどもそのなかでなんとか別の形として再生していこうという、レジリエンスとはそういった言葉だと捉えていただけたらと思います。

このような光と影の歴史から、私たちは何を学んでいけるのでしょうか。というお話を、山田さんの後にさせていただくのは、実は今日で2回目でございます。1回目は、重田先生がご紹介くださいましたように、11月11日、学生さんや日光市さんの前でお話しさせていただきました。その時、一番心に残ったスライドが、実はこの一枚です。山田さんがさきほどもお見せになりましたが、死の山だったところが、今はこんなふうになんか緑になっていると、30年経って植えた苗木が見事な緑になっていくと。あの荒涼とした死の山はもうない、この生き生きとした緑を見て欲しいと。もちろん完全復興とはまいません。同じ環境は戻りません。でも私はこれを見たときに、足尾町の方々は、光と陰に翻弄され、歴史の変遷をある意味で抱きしめながら、日常を紡いできたのだと思いました。そこに人間の尊厳といいますか、不屈の精神を感じました。そうしたすべてを感じる場所としての足尾の意義を、お伝えしておきたいと思います。

そして最後にもう一点、過去から学び未来につなぐということも考えておきたいと思えます。足尾や渡良瀬では大変な社会的ジレンマが生じたのですが、それは明治期だったからだとは私達は思いがちです。今はもうこのようなことは起きない、昔のことなのだと。通常はそうですし私達もそう思いたい。でも実はそうでもないという局面もあります。残念ながら歴史は繰り返しました。例えば足尾銅山鉱毒事件の半世紀後に水俣病が起きました。そしてつい最近に福島原発震災が起きました。

これは私にとってはある意味でとてもシュールなことであります。これだけ科学技術も環境技術も環境政策も発達した時代において起きたことだからです。福島原発では事故収束の道筋がまだに見えておらず、巨額な除染費用、そして作業員被ばくも続いております。苦しい避難生活を送り、生業や生きがいを喪失し、地域社会が分断され、健康リスクがあっても語られない、そして避難先で偏見やいじめがある、このようなこのような非常に厳しい局面が現在もあります。彼らは、復興政策の中から振り落とされていっています。

今日は時間が限られておりますので、このお話をこれ以上私は致しません。実は宇都宮大学の多文化公共圏センターで原発震災のプロジェクトをしておりますので、これはまた別の機会でお話しすることがあるかもしれません。

今日、ここで私が申し上げたいのは、このような受苦と受益の間で社会的ジレンマが極めて大きい事件が繰り返されているが、もう繰り返されてはならないということです。このようなことを言わねばならないこと自体、国際的な観点、歴史的な軸からみると、極めてシュール・超現実的に見えます。なぜならば、先進的民主主義国家では、さきほど申し上げた通り70年代以降、公害技術だったり、様々な政策手法が、随分発達してきているからです。そして90年代になると、環境問題への反省のもとで、持続可能な発展に向けてい

ろんな教訓や蓄積が集約されていっている、その一つの形が資料にも載せております Sustainable Development Goals、SDGs でもあります。

これは、冒頭の挨拶で、佐々木学部長もおっしゃっておられたことですが、誰一人取り残さないという持続可能な発展のための目標です。持続可能で多様性と包括性のある社会の実現のためにいろんな原則であったり目標であったり、そういうものが語られて、日々それにむかって実際に動いているのです。

もう少し説明しますと、環境問題に対する見方は時代によって変わっています。足尾銅山鉍毒事件の時代は、プロメテウス派、つまり環境問題は起きてないかとるにたらない、という考え方が主流でした。それに対して、生存主義というのは、環境問題を重視するために経済活動は止めても仕方がない、厳格な対応が必要という考え方です。この二つの考え方がずっと対峙していました。しかし、そこから人類は叡智を結集していきました。たとえば市民参加による問題解決ができる、あるいはうまく市場を使うといいかもしれない、個人の意識性の変革などです。そして経済と環境保護はあらゆる主体の関与により両立するという考え方、このような持続可能な発展という考え方は、今日までに、複数の国際的な宣言となり、サミットレベルで実際文書化されています。そして企業もこれをよく受け止めておられる。環境を考えない企業は今や生き残れない時代、となってきております。

余談ですが、前の職場でそのような民間企業と環境ガバナンスという研究プロジェクトに携わったことがございました。そのときに、公害時代以降、電力であったり、あるいは素材産業であったり、あるいは林業であったり、いろんな業界の方々が大変な苦労をしながら環境問題に対応してきているというお話を多く聞いてきました。そのような経験から、人類は英知を積み重ねて、環境と経済を両立する方法を編み出してきていることを実感しました。

つまり、申し上げたように、エコロジー的近代化、経済と環境保護はあらゆる主体の関与によって両立するという持続可能な発展の考え方が今日主流になってきているのです。最後に申し上げたいことは、こうした思想のエッセンスは、実は、田中正造の思想の中に含まれているということです。いくつかその事例をご紹介しますと思います。

例えば、正造は人生の終焉で、谷中村で家屋が強制破壊された後に、住人と一緒に残りました。なぜ、残留民と一緒に非常に貧しい中に残ったのか。もっとも弱い残留民によりそったその理由は、「底辺の人民に学ぶ」という言葉に見いだすことができます。これは、さきほど言った SDGs の、「誰一人取り残さない」と通底する思想です。

このような原則はそれこそ 1992 年のリオサミット以降、重ねて強調されてきました。例えば第 10 原則は「環境問題はそれぞれのレベルで関心のあるすべての市民が参加することにより、最も適切に扱われる。」とされています。「すべての」というところで特に強調されるのは、意思決定の参画があまりない女性であったり若者であったり、先住民であったり抑圧された人々です。こういった色々な人たちを包摂する平和な社会と、そのなかでは

意思決定へのアクセス、そしてあらゆるレベルにおける情報公開、説明責任、こういったものが重要だとされているのです。正造の思想は、これを先取りしているのです。

次の言葉は、とても有名なのでご存知の方もおられるかもしれません。「真の文明は、山を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」という言葉です。平和開発及び環境保全是相互依存的で切り離すことができない、これはもう 1992 年のリオ宣言でも言われていますが、今回の SDGs の中にもやはり含まれています。貧困と国内的国際的不平等との戦い、地球の維持、などなどの事項はお互い関連していると、そう書かれています。

3 つ目は、「人民を救う学問を見ず」これは当時正造が嘆いた言葉であります。裏を返すと学問は人民を救う為に使われるべきだということです。そのような思想は、1972 年、ストックホルム人間環境会議の時代から見出せます。「科学技術は人類の共通の利益のために、環境の危険のため管理・制御すること、および環境問題を解決することに利用されなければならない」と、ストックホルム宣言にはあります。科学を戒める言葉は、リオ宣言にもあります。予防的原則のところ。「不可逆的被害の恐れがある場合、完全な科学的学術性の欠如が、環境悪化を防止する費用対効果の大きい対策を延期する理由として使われてはならない」。正造の思想と通底する言葉です。

このような先見性のある言葉も、実は足尾鉍毒事件をめぐる歴史の中に残っていることを、ぜひみなさんには知っていただきたい。これを足尾銅山鉍毒事件の今日的意義として申し上げたいと思います。最後に、結びに変えて、日光市さんの世界遺産暫定一覧表追加記載がされている文書からの言葉を、恐縮ですが、最後に紹介させていただきたいと思います。

「足尾銅山の建造物群は、単なる近代産業の記念物ではない。公害反対運動の中軸となった渡良瀬河下流域の遺跡とともに、その景観は 20 世紀の縮図であり、我々人類が 21 世紀でなすべきことをしめしている、現在進行形の遺産なのである。」

本日したお話の大半は、11 月 11 日に学生さんにも伝えようとしたものです。短い時間で、到底力不足であったかもしれませんが。ですが、私も山田さんと同様、このあと学生さんたちがこの足尾をどのように引き継いでレジリエンスをしていくのか、皆さんの言葉を楽しみにしたいと思います。

## 足尾銅山鉍毒事件 の今日的意義

### 過去に学び 未来につなぐ

高橋若菜

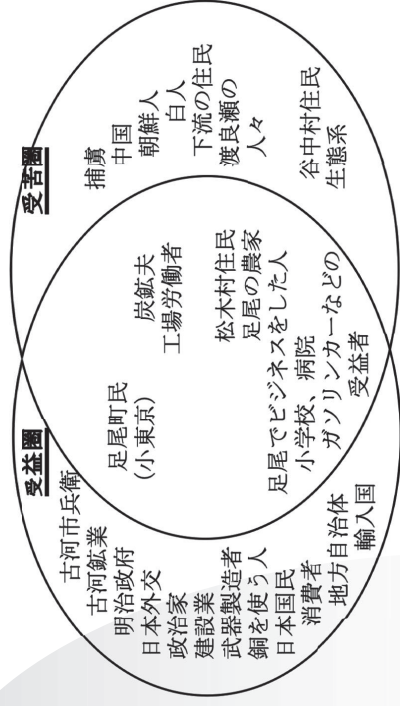
宇都宮大学国際学部准教授

1

2019/2/26

宇都宮大学多文化公開センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

## 環境問題＝政治問題 受益・受苦・社会的ジレンマの構図



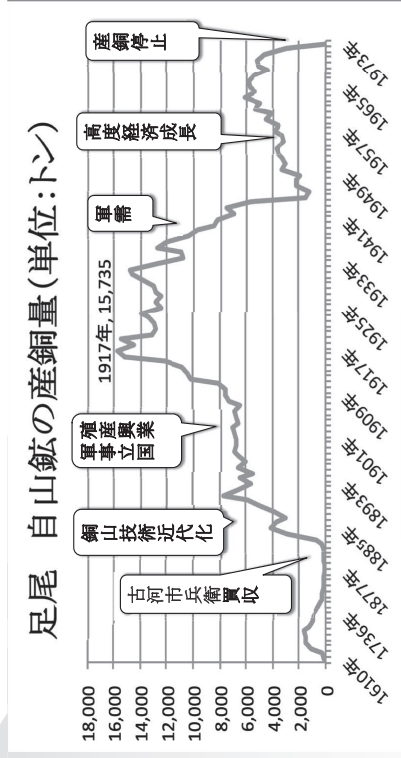
2019/2/26

宇都宮大学多文化公開センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

2

## 足尾銅山の繁栄

※銅は明治中期 主要輸出品のひとつでもあった



出所: 布川丁(2009)『改訂 田中正造と足尾鉍毒事件を歩く』随想社 26頁  
村上安正(1998)『銅山の町 足尾を歩く―足尾の産業遺産を訪ねて』わたらせ川協会 146頁より作成 (古河経営前の産銅は、『銅山の巻』および『足尾銅山』記載の産銅量の平均値)

2019/2/26

宇都宮大学多文化公開センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

3

## 明治中期の主要輸出品

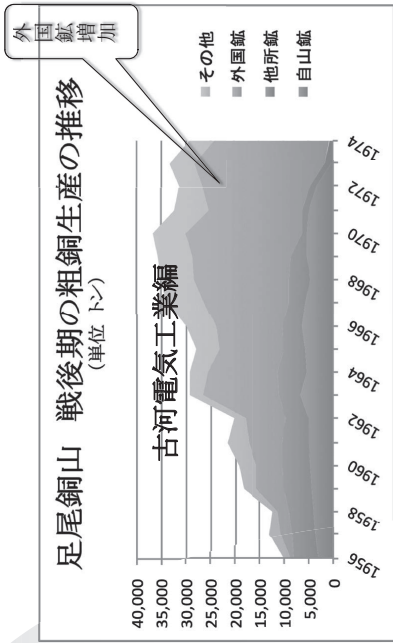
	1	2	3	4	5	6
1897	生糸	綿糸	石炭	絹織物	茶	銅
1907	生糸	絹織物	綿糸	銅	石炭	綿織物
1913	生糸	綿糸	綿織物	絹織物	銅	石炭

2019/2/26

宇都宮大学多文化公開センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

4

# 産銅 → 精錬 戦後期の粗銅生産の推移 (ton)

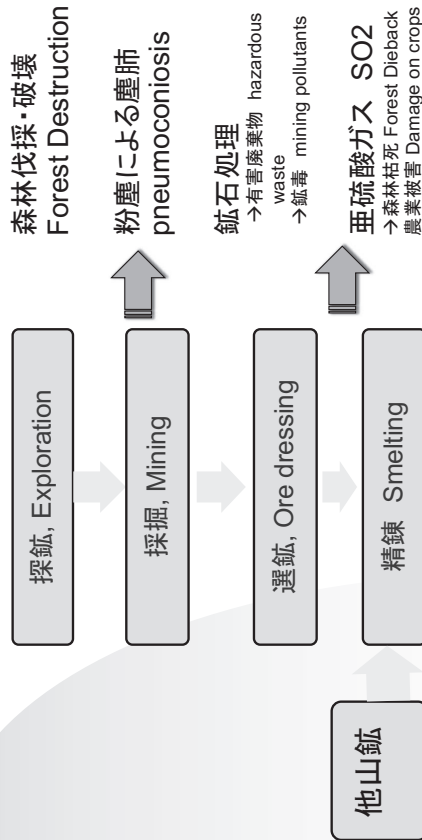


2019/2/26

宇都宮大学文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

5

# 銅生産のプロセスと主要な環境影響



2019/2/26

宇都宮大学文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

7

# 足尾町の盛衰 明治・大正期「小東京」



古河掛水倶楽部

## 昭和～平成

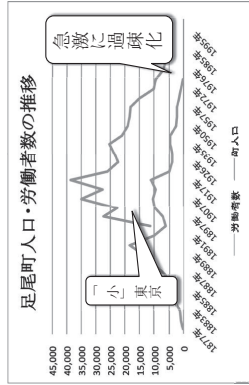
戦後の高度成長  
閉山→急激な過疎化  
製錬所閉所→高齢化・限界集落化

2019/2/26

宇都宮大学多文化公共圏センター・



古河市兵衛葬儀 小野崎 (2006)



# 足尾銅山鉱毒事件

受害と受益の乖離・複合性

→ 著しい人権侵害  
松木村村民・足尾住民  
谷中村村民・渡良瀬流域住民  
強制連行された外国人  
中国人捕虜、朝鮮人、白人

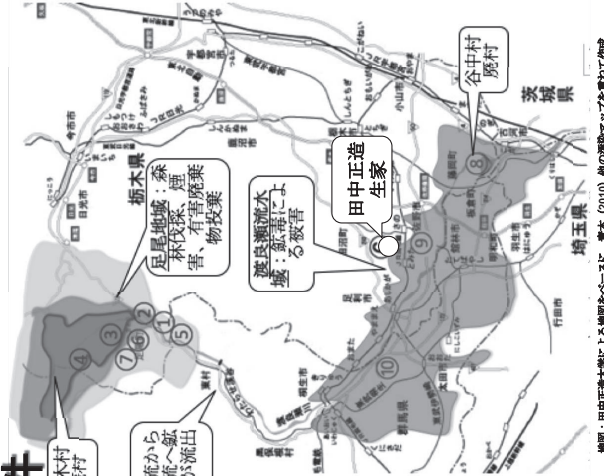
多重災害

森林伐採  
煙害・大気汚染  
有害廃棄物投棄  
鉱毒による水質汚染  
土壌汚染

→ 生態系破壊  
人体被害  
ふるさと喪失

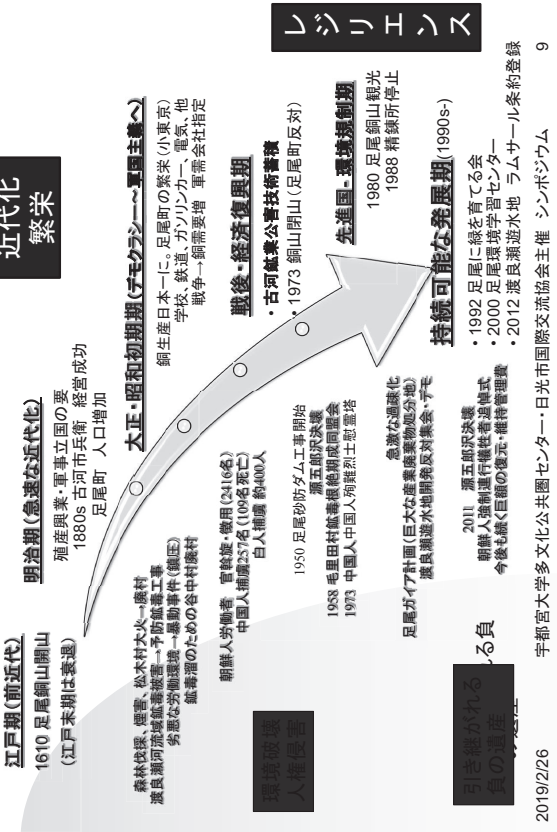
2019/2/26

宇都宮大学多文(





# 足尾銅山の光と影



2019/2/26

宇都宮大学多文化共生センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

9

# 負の遺産とレジリエンスと:足尾地域

**足尾銅山観光** 植樹(足尾に緑を育てる会) 松木村 カラミと墓碑

**足尾歴史館** 朝鮮人強制連行犠牲者追悼碑 中国人殉難烈士慰霊塔

2018/2/26 宇都宮大学多文化共生センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム 11

# 負の遺産とレジリエンスと:渡良瀬地域

**毛里田 折念 鉱毒根絶の碑** 旧谷中村合同慰霊碑

**渡良瀬遊水地(上空から)** 谷中村遺跡

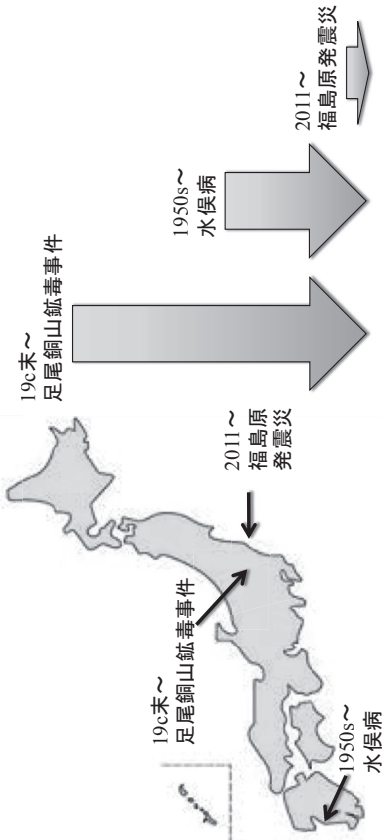
2019/2/26 宇都宮大学多文化共生センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム 10

# 山田功さん資料より 足尾まるごと井戸端会議

**足尾の光と影を抱きしめて 日常を紡ぐ足尾の人々** 不屈の精神 人間の尊厳

2019/2/26 宇都宮大学多文化共生センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

# 過去に学び、未来につなぐ ※引き継がれた被害構造



見えない事故終息への道筋、巨額な除染費用、作業員被ばく  
苦しい避難生活・生業・生きがい喪失、家族、友人、地域社会の分断  
健康リスクと不安増大、語れない被害、多様な被害者への偏見やいじめ…

2019/2/26

宇都宮大学多文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

13

## パラダイム・シフト

- **プロメテウス派**：環境問題は起きていない・とるにたらない。
- **生存主義**：環境問題は深刻であり、厳格な対応が必要とする。
- **行政的合理主義**：専門的な資源管理官僚制により事後的に問題解決できる。
- **民主的プラグマティズム**：市民参加により問題解決できる。
- **経済的合理主義**：市場の力は個人と組織の行動を変えさせる強力な道具。
- **緑のラディカリズム**：個人の意識性の変革、緑の政治により解決できる。
- **持続可能な発展**：経済と環境保護はあらゆる主体の関与により両立する。
- **エコロジー的近代化**：資本主義的な政治経済は、意識的にステータマチックな介入により、環境に優しい方向に再編成できる。

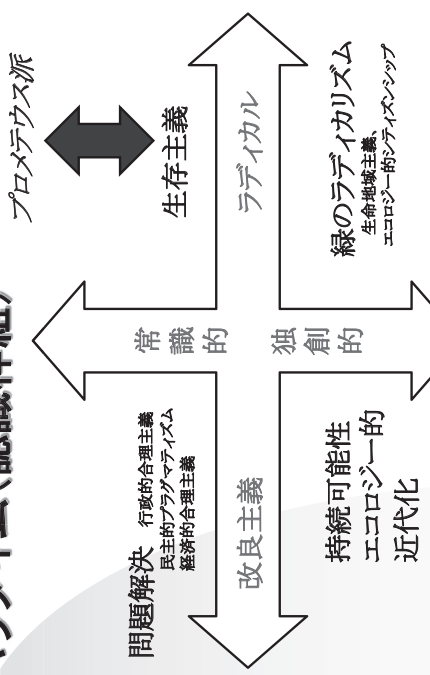
持続可能な発展のパラダイムは、複数の国際  
的な宣言(国際規範)で文書化  
環境を考えない企業は生き残れない時代に

2019/2/26

宇都宮大学多文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

15

# 環境問題に向き合う環境政治学の視座 ：パラダイム(認識枠組)



宇都宮大学多文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

2019/2/26

14

## 田中正造(1841-1913)



- 明治期の政治家
- 佐野市の名主の家に出生。
- 1880 栃木県会議員
- 1890- 衆議院議員 (立憲改進黨)：足尾鉱毒事件で度々政府へ質問書
- 1901 明治天皇へ直訴
- 以後も運動を続行、谷中村に居をうつし、強制買収、遊水池化計画に抵抗するが、貧弱の中で病死。

田中正造の先見性  
～持続可能な発展の思想を先取り

2019/2/26

宇都宮大学多文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

16

## 1) 「民声叫べ」(1909(明治42):底辺の人民に学ぶ)

リオ宣言(1992年)より

- 第10原則:環境問題は、それぞれのレベルで、関心のある全ての市民が参加することにより最も適切に扱われる。
- 第20原則:女性性は、環境管理と開発において重要な役割を有する。
- 第21原則:持続可能な開発を達成し、すべての者のためのより良い将来を確保するため、世界の若者の創造力、理想及び勇気が、地球規模のパートナーシップを構築するよう結集されるべきである。
- 第22原則:先住民とその社会及びその他の地域社会は、その知識及び伝統に鑑み、環境管理と開発において重要な役割を有する。
- 第23原則:抑圧、支配及び占領の下にある人々の環境及び天然資源は、保護されなければならない。

SDGs

- 誰一人取り残さない
- 目標16. 持続可能な開発のための平和で包摂的な社会を促進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供し、あらゆるレベルにおいて効果的で説明責任のある包摂的な制度を構築する

2019/2/26

宇都宮大学多文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

17

## 3) 「人民を救う学問を見ず」(1907(明治40年))

ストックホルム国連人間環境宣言(1972年)

- 第18項 科学技術は経済・社会の発展への寄与の一環として、人類の共通の利益のため環境の危険を見極め、回避し、制御すること、及び環境問題を解決することに利用されなければならぬ。

リオ宣言(1992)

- 第15原則:環境を保護するため、予防的方策は、各国により、その能力に応じて広く適用されなければならない。深刻な、あるいは不可逆的な被害のおそれがある場合には、完全な科学的確実性の欠如が、環境悪化を防止するための費用対効果の大きい対策を延期する理由として使われてはならない。

2019/2/26

宇都宮大学多文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

19

## 2) 「真の文明や山を荒さず、村を破ら ず、人を殺さざるべし」(1912(明治45))

リオ宣言(1992年)より

- 第24原則:戦争は、元来、持続可能な開発を破壊する性格を有する。
- 第25原則:平和、開発及び環境保全は、相互依存的であり、切り離すことはできない。

SDGs(持続可能な開発のためのアジェンダ、2015年)

- 第13項:統合されたアプローチの重要性 これらの主要な会議及びサミットの課題並びにコミットメントは、相互に関連しており、統合された解決が必要である。これらに効果的に対処するために、新たなアプローチが必要である。持続可能な開発が意味するところでは、すべての形態及び側面の貧困撲滅、国内的・国際的不平等との戦い、地球の維持、持続的・包摂的・持続可能な経済成長を作り出すこと、並びに社会的包摂性を生み出すことは、お互いに関連し合っており、相互に依存している。

2019/2/26

宇都宮大学多文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

18

## むすびにかえて

**足尾銅山の建造物群は単なる近代産業の記念物ではない。公害反対運動の中軸となつた渡良瀬川下流域の遺跡等とともに、その景観は20世紀の縮図であり、我々人類が21世紀になすべきことを示している現在進行形の遺産なのである**

(日光市「世界遺産暫定一覧表追加記載提案書」)

2019/2/26

宇都宮大学多文化公共圏センター・日光市国際交流協会主催 シンポジウム

20